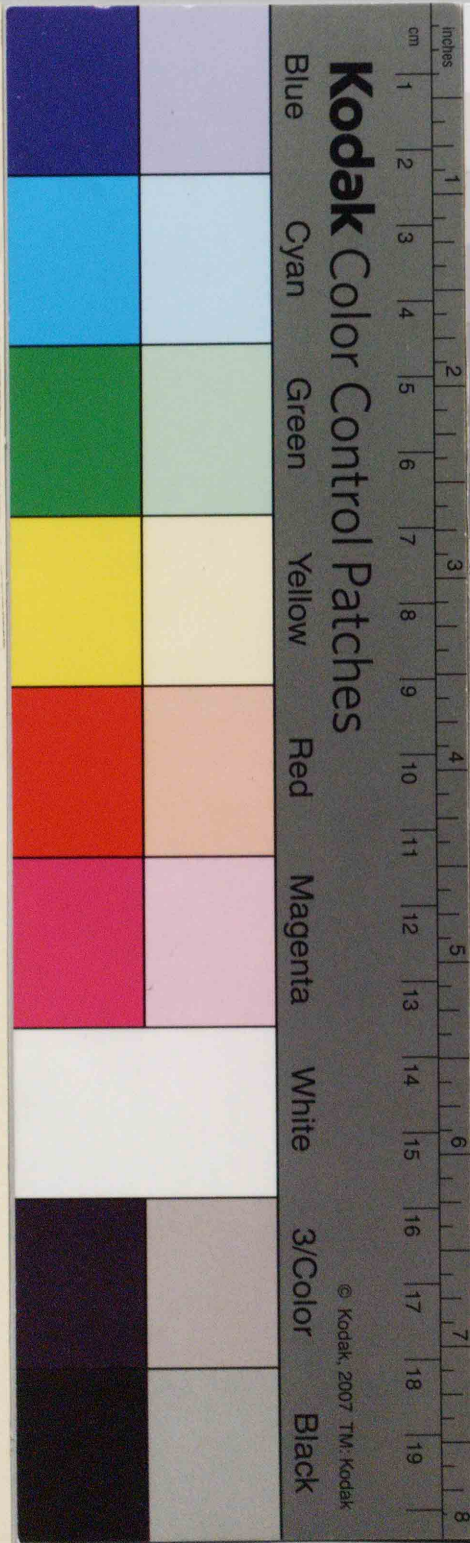


40346

教科書文庫

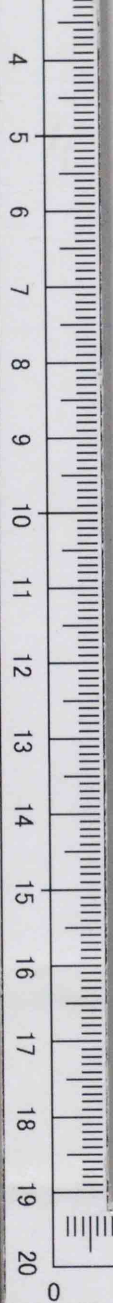
4
760
31-1932
01304 49411



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

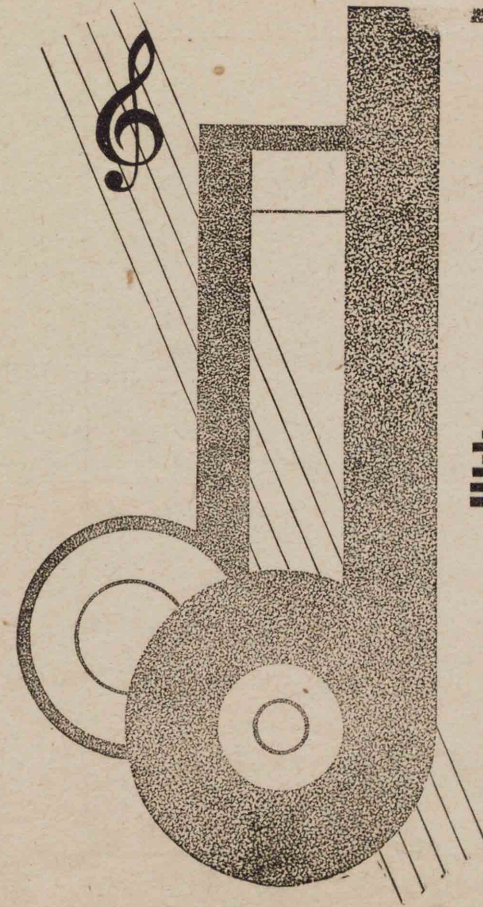
© Kodak, 2007 TM: Kodak



中央図書館

広島大学図書

0130449411



文 部 省

新 訂
尋 常 小 學 唱 歌

第 四 學 年 用

700

緒 言

- 一、本書ハ音楽教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。
- 二、本書ハ每卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。
- 三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。
- 四、本書ノ歌詞ハ努メラ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 五、本書ノ教材排列ハ強ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。
- 六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミニ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

昭和七年十月

文 部 省

目 次

一 春の小川.....2	一五 牧場の朝.....36
二 かげろふ.....4	一六 水 車.....38
三 むなかの四季.....6	一七 廣瀬中佐.....40
四 靖國神社.....10	一八 たけがり.....42
五 蠶.....14	一九 山 雀.....46
六 五 月.....16	二〇 霜.....48
七 藤の花.....18	二一 八幡太郎.....50
八 動物園.....20	二二 村の鍛冶屋.....54
九 お手玉.....22	二三 餅つき.....58
一〇 曾我兄弟.....24	二四 雪合戦.....60
一一 夢.....28	二五 近江八景.....62
一二 雲.....30	二六 何事も精神.....66
一三 漁 船.....32	二七 橋中佐.....70
一四 夏の月.....34	

目 次

一、春の小川

一、春の小川はさらさら流る。
 岸のすみれやれんげの花に、
 にほひめでたく、色うつくしく
 咲けよ咲けよと、ささやく如く。

二、春の小川

二、春の小川はさらさら流る。
 蝦やめだかや小鮒の群に、
 今日も一日ひなたに出でて
 遊べ遊べと、ささやく如く。

三、春の小川

三、春の小川はさらさら流る。
 歌の上手よ、いとしき子ども、
 聲をそろへて小川の歌を
 うたへうたへと、ささやく如く。

春の小川

♩=104

春の小川

ハ — ル ノ ヲ ガ ハ ハ サ ラ サ ラ ナ ガ ル
 は — る の を が は は さ ら さ ら な が る
 ハ — ル ノ ヲ ガ ハ ハ サ ラ サ ラ ナ ガ ル
 は — る の を が は は さ ら さ ら な が る

キ — シ ノ ス ミ レ ヤ レ シ ゲ ノ ハ ナ ニ
 え — び や め だ か や こ い ぶ シ な の む れ に
 ヲ — タ ノ ジ ャ ウ — ズ ヨ ヲ ト シ ナ キ コ ド モ
 ヲ — タ ノ ジ ャ ウ — ズ ヨ ヲ ト シ ナ キ コ ド モ

ニ — ホ ヒ メ デ タ ク イ ロ ウ ツ ク シ ク
 け — ー も ち ち へ ひ な が た た ノ い で て
 コ — エ ヲ ヲ ロ へ ヲ ナ ハ ハ ノ ウ タ ノ ウ タ
 コ — エ ヲ ヲ ロ へ ヲ ナ ハ ハ ノ ウ タ ノ ウ タ

サ — ケ ヨ サ ケ ヨ ト サ サ ヤ ク ゴ ト ク
 あ — そ べ サ そ べ と さ さ や や く ゴ と ク
 ウ — タ へ ー タ へ と さ さ や や く ゴ と ク
 ウ — タ へ ー タ へ と さ さ や や く ゴ と ク

かげろふ

かげろふ

Musical notation for the first line of the song, starting with a treble clef, a key signature of two sharps (F# and C#), and a tempo marking of 138. The melody is in 8/8 time. Dynamics include *mp*.

一 ユラ ユラ ユラ キラキラキラ
二 ゆら ゆら ゆら きらきらきら

Musical notation for the second line of the song, with dynamics *mp* and *mf*.

ハルノヒノヒカリヲウケテイシノホ
はるのひのどけさみせてくさのほ

Musical notation for the third line of the song, with dynamics *mf*.

トリニハシノウヘニモユルカゲロフ
すゑにはなのうへにもゆるかげろふ

四

Musical notation for the fourth line of the song, with dynamics *f* and *p*.

ミチユクヒトノタモトニモツレ
くづれてたちてみだれてゆられて

Musical notation for the first line of the second page, with dynamics *mp* and *rit.*

トビカフテフーノハカーゼニユレテ
あるかともみればはやかげもなく

かげろふ

二、かげろふ

一、ゆら ゆら ゆら

きらきらきらきら

春の日の光を受けて、

石のほとりに、橋の上に

燃ゆるかげろふ。

道行く人の袂にもつれ、

飛びかふ蝶の羽風にゆれて。

二、ゆら ゆら ゆら

きらきらきらきら

春の日のどけさを見せて、

草の葉末に、花の上に

燃ゆるかげろふ。

くづれて立ちて、亂れてゆれて、

あるかと思れば、はや影もなく。

るなかの四季

♩=116

るなかの四季

mf

ニでデで
ンるンば
メコスそ
チイクの
イしナリ
タすトロ
ハすコゐ
デさモく
ンがカタ
サげヲリ
ハすトを
ヲぶクを
チらヤだ
ミなニそ

リヘクむ
カナビず
ザさヒは
ナクガが
ハゆコし
ハるイナ
ナラタは
ルにノま
デラリヤ
ガがツも
ホなマよ
ハひノは
ギタラる
ムラムよ

p

リテクス
バれツま
ヒくツな
ツかハん
タしリこ
ビつヨい
トいヒだ
テフイルの
一ツガぎ
テフイルの
ルいハが
ムがネは
ネないは

六

るなかの四季

クくテな
ルゴシカ
カウカざ
モげワし
トかカこ
モきニし
タつヒと
ゼにテの
カきゲカ
ルさロな
ハてヒゐ
ヤる一も
クゑテれ
一ツ一
フウカこ

mf

メばテも
トれメと
ヲヘツお
ムカニの
ツみラみ
ハとワす
クあタね
ニちテく
ラみゲひ
チちアち
コみシも
ラるニの
チヘミな
アカモた

ルるホる
トかがも
フひエつ
モがニり
ゴゆホふ
ルつガき
ハよエゆ
ニにテに
シゑッば
マすロき
ヒはソの
シゑイテ
マすナけ
ヒはカふ

七

三、あなかの四季

一、道をはさんで畑一面に、

麦は穂が出る、菜は花盛。

眠る蝶蝶、とび立つひばり、

吹くや春風、たもとも軽く、

あちらこちらに桑つむ少女、

日まし日ましにはるごも太る。

二、ならぶ菅笠、涼しいこゑで

歌ひながらに植行く早苗、

ながい夏の日いつしか暮れて、

植ゑる手先に月かけ動く。

かへる道道あと見かへれば、

葉末葉末に夜つゆが光る。

三、二百十日も事なくすんで、

村の祭の太鼓がひびく。

稲は實がいる、日和はつづく、

刈つて、ひろげて、日に乾かして、

もみに仕上げて、俵につめて、

家内そろつて、笑顔に笑顔。

四、そだを折りたくゑるりの側で、

夜はよもやま話がはずむ。

母がてぎはの大根膾、

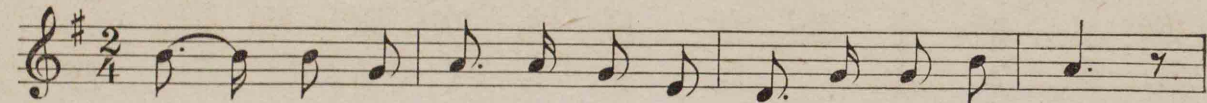
これもあなかの年こしぎかな。

棚の餅ひく鼠の音も

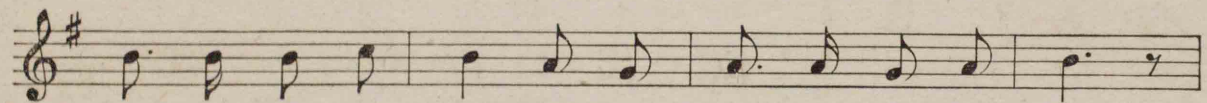
更けて、軒端に雪降積る。

靖國神社

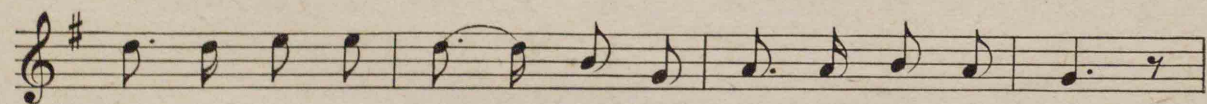
♩ = 66



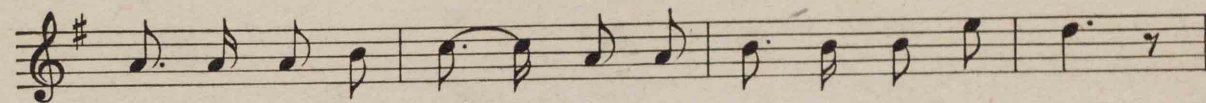
一ハ一ナハサクラギヒトハブシ
二いのちはかゝろくぎはおもし



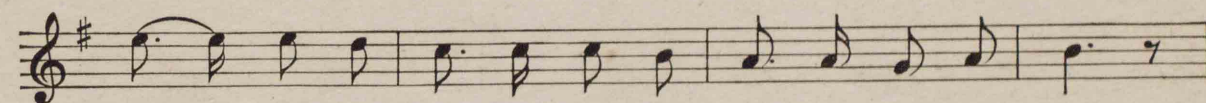
ソノサクラギニカコマルル
そのぎをふみておほきみに



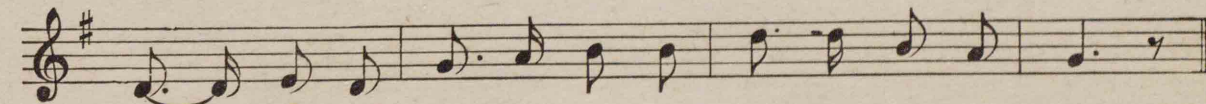
ヨヲヤスク一ニノミヤシロヨ
い一のちささげしますらをよ



ミクニノタ一メニイサギヨク
かゝねのとりののおくふかく



ハ一ナトチリニシヒトヒトノ
かみがきたゝかくまつられて



タ一マハココニゾシヅマレル
ほまれはよゝにのこるなり

四、靖國神社

一、花は櫻木、人は武士。

その櫻木に圍まるる

世を靖國の御社よ。

御國の爲に、いさぎよく

花と散りにし人人の

魂は、ここにぞ鎮まれる。

二、命は軽く、義は重し。

その義を踐みて大君に

命ささげし大丈夫よ。

銅の鳥居の奥ふかく

神垣高くまつられて、

譽は世世に残るなり。

五、蠶

一、風暖き五月のはじめ、
里の少女が取るや羽箒。

掃きおろしたる春のかひこ、
さながら黒き塵の如く。

二、四度の眠いつしか過ぎて、
箸の太さは小指となりぬ。

きそひきをひて桑はむ音、
木の葉に雨のそそぐ如く。

三、髪も結ばず、夜さへ寝ねず、
心つくして一月あまり

努めしかひの見えたる今日、
うれしや、繭は山の如く。

蠶

♩=112

歌

メテズ ジギネ ハスイ ノカヘ ツシサ ヲツル ゴイヨ キリズ カむバ タねス タのム アビモ ゼたミ カよカ

キぬリ バウナア ハとキ ヤビツ ルゆト トこヒ ガはテ メさシ トとク フふツ ノのロ トシコ サはコ

コと一 ヒおケフ カむル ノはタ ルはエ ハくミ ルてノ シそカ タひヒ タ一ヒ シそカ オひメ キそト ハきツ

クくク トとト ゴごゴ ノぐノ リそマ チそヤ キのハ キ一ハ クあマ クめユ ラにヤ ガはシ ナのレ サこウ

一四

五月

♩=46 mp

五月
一カゼワタルゴグワツノヤマヲミ
二かせかをるごぐわつのはまにき

アグレバヤマヲオホヘルシヒノキ
てみればはまにさいたるはまなす

ノワカバアヲバノヒニハエーテサ
のすなにはひつつひにてりてゆ

ワサワユラグイサーギヨササ
らゆらゆらぐうつーくしささ

一六

五月
ナガライキテアルヤウーニ
ながらものをいふやうーに

六、五月

一、風わたる
五月の山を見上ぐれば、
山をおほへる椎の木、
若葉・青葉の陽に映えて、
さわさわゆらぐいさぎよさ。
さながら生きてあるやうに。

二、風かをる
五月の濱に来て見れば、
濱に咲いたるはまなすの、
砂にはひつつ陽に照りて、
ゆらゆらゆらぐ美しさ。
さながらものをいふやうに。

七、藤の花

一、野山もかすむ春雨の

晴れて、なごりの

水嵩に車はげしや藤の花

しぶきに濡れて、日に映ゆる。

二、雲雀の聲は夕空に

消えて、此方の

藪畑や穂麥にとどく藤の花

しづかに揺れて、日は暮るる。

藤の花

♩=104

藤の花

一 ノ ヤ マ モ カ ス ム ハ ル サ メ ノ
 二 ひ ば り の こ 忍 は ゆ ふ 一 ぞ ら に

ハ レ テ ナ ゴ リ ノ ミ ズ カ サ ニ
 き 一 え て こ な た の や ぶ ば た や

ク ル マ ハ ゲ シ ヤ フ デ ノ ハ ナ
 ほ む ぎ に と 一 ど く ふ ち の は な

シ ブ キ ニ ス レ テ ヒ ニ ハ ユ ル
 し づ か に ゆ れ て ひ は く る る

八、動物園

一、動物園ののどかな午後は、
 孔雀がすつかり得意になつて、
 うち中一はいひろげて見せる、
 金ひか模様もようの晴着はれぎの衣裳いしやう。

二、ライオンも、虎も、眠つてゐるが、
 駱駝は、のんきなとぼけた顔で、
 煎餅たべては、けろりとしてる、
 故郷の沙漠も忘れたやうに。

三、木のぼり上手、ぶらんこ上手、
 お猿はいつでも愛敬者よ。
 鷺鳥のかなでるオーケストラに、
 よちよちダンスを、あひるが踊る。

動物園

♩=76

動物園

ドウ ブ ツ エン ノ ノ ド カ ナ ゴ ゴ ハ
 ー ら い おん も とら も ね む つ て ろ ろ ろ ろ
 三 キ ノ ボ リ ジヤウ ズ ブ ラ コ ジヤウ ー ズ

ク ジャ ク ガ ス ツ カ リ ト ク イ ニ ナ ッ テ
 ら く だ は の ン き な と ぼ け け け け け け け け
 オ サ ル ハ イ ツ デ モ ア イ キ ヤ ウ ー モ ノ ヲ ヲ

ウ チ デ ユ イ ツ バ イ ヒ ロ ゲ テ ミ セ ル
 セ ン ベー た ヲ ペ ー は け ろ り ケ と し て ラ ニ
 ガ テ ウ ノ カ ナ デ ル オ オ ー ス ト シ ト ラ ニ

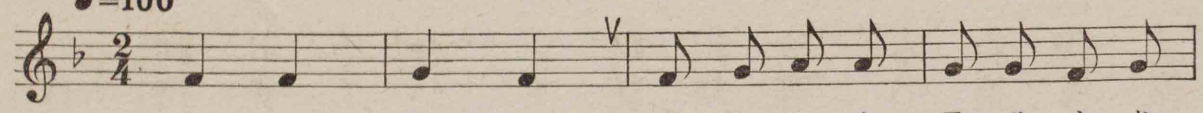
キ ン ビ カ モ ヤ ノ ハ レ ギ ノ イ シ ヤ ウ ー
 コ キ ャ ヲ の さ ー く も わ す ぐ た や シ ヤ ウ ー
 ヲ キ ャ ヲ チ の さ ー く も わ す ぐ た や シ ヤ ウ ー
 ヲ キ ャ ヲ チ の さ ー く も わ す ぐ た や シ ヤ ウ ー

二〇

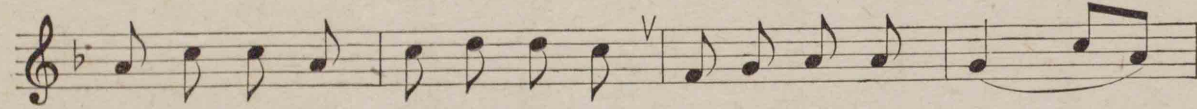
お 手 玉

お
手
玉

♩=100



一 ヒイ フウ ミ ヨ イ ツ ツ ノ ア ツ カ ヒ
二 しろ しろ あか あを りむ ら さ き く は へ
三 ウヘ シタ タテ ヨコ リヤウ テ ノ ハ ヤ ワ ザ

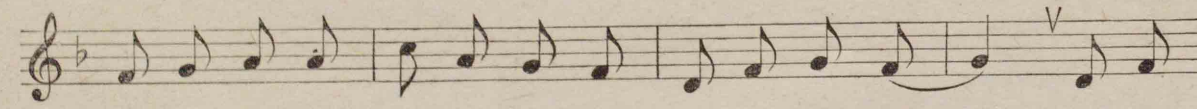


テ サ キ ノ ハ タ ラ キ ヒ ト ツ ニ ウ 一
い つ っ の お だ き あ ー や に と ー
ミ ゴ ト ニ ウ ケ ト メ アイ ー ツ ツ イ ツ



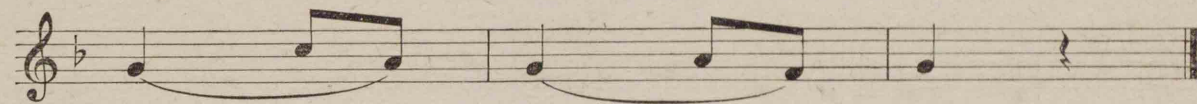
ケ 一 一 テ サ ラ リ ト ナ ゲ レ バ
だ 一 一 り り ち ど り に ぬ け け た へ り
い 一 一 ロ ノ コ ラ ラ ズ ソ ロ ロ テ

三



ミ ダ レ テ オ チ テ ハ ナ モ ヤ ウ 一 ハ ナ
と び か ひ ユ き か ふ シ マ シ シ ー ひ て ー
マ ヅ マ ャ イ ツ ク フン カ シ マ シ ャ シ タ カ シ

お
手
玉



モの マ 一 一 ヤウ 一 一 一ひタ
マ マ シ タ

九、お 手 玉

一、^{ひい}一・二・三・四、^い五つのあつかひ、

手先のはたらき、

一つに受けて、

さらりと投げれば、

みだれて落ちては

花もやり、花もやり。

二、^{しろ}白・^{あか}赤・^{あお}青、^{むらさき}紫加へて、

五つのお手玉、

あやに飛んだり、

ちどりにぬけたり、

飛びかひ行きかふ

蝶のまひ、蝶のまひ。

三、^{うへ}上下・^{たて}縦横、^{りやうて}両手の早わざ、

みごとに受止め、

^い五つ^{いろ}五色

残らず揃へて、

まづまづ一貫

かしました、かしました。

一〇、曾我兄弟

一、富士の裾野の夜はふけて、
 うたげのとよみ静まりぬ。
 屋形屋形の灯は消えて、
 あやめも分かぬさつきやみ。

二、「來れ、時致、今宵こそ、
 十八年のうらみをば。」
 「いでや、兄上、今宵こそ、
 ただ一撃に敵をば。」

三、共に松明ふりかざし、
 目ざす屋形にうち入れば、

かたき工藤は酔臥して、
 前後も知らぬ高躰。

四、「起きよ、祐經、父の仇、
 十郎・五郎、見參。」と、
 枕を蹴つておどろかし、
 起きんとするを、はたと斬る。

五、仇は報いぬ、今はとて、
 「出合へ、出合へ。」と呼ばはれば、
 折しも小雨降りいでて、
 空にも名のるほととぎす。

夢

♩=84

夢

— キンノジ ドウ — シャニ トビノル ト ハシルヨ
 二 ぎんのひ かう — きに とびの る と あがるよ

cresc. ハシルヨ ド コー マ デ モ オホキナミ チヲ
 あがるよ どこまでも かさなるくもを

f マツシクラ トウ — トウ — ガケカラ サカサマニ
 つきぬけて とう — とう — くわせい の せかいへと

mp オチタト オモ—ヘバ ユメダツ タ
 ついたとおも—へば ゆめだつ た

一、夢

一、金の自動車に飛乗ると、
 走るよ走るよ、何處までも、
 大きな道をまっしくら、
 とうとう崖からさかさまに、
 落ちたと思へば、夢だつた。

二、銀の飛行機に飛乗ると、

上るよ上るよ、何處までも、
 重なる雲を突抜けて、
 とうとう火星の世界へと、
 ついたと思へば、夢だつた。

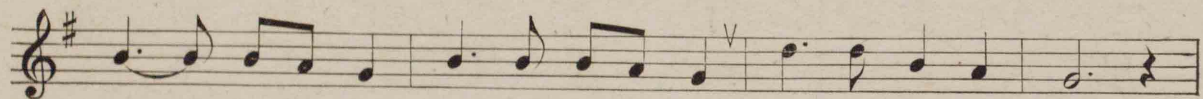
雲

♩=104

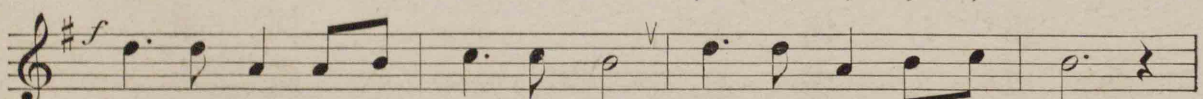
雲



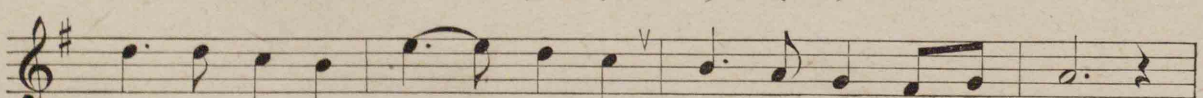
ア サ ヒ ニ モ ユ レ バ モ ミ ノ キ ヌ
と き に は つ ら な る み と と き な り
ハ ル ケ キ ヤ マ ノ ハ ト ホ キ オ キ



ユフ ヒ ニ ハ ユ レ バ ニ シ キ ニ テ
と き カ ニ は か さ な る な み ル み チ
シ ヅ カ ニ ニ ヤ ス ム ト ミ ル ウ チ



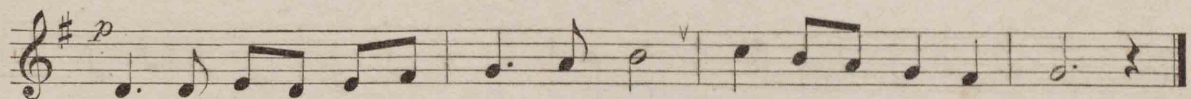
ハ レ タ ル ソ ラ ノ シ ロ ム ク ハ
あ る ひ は は け も の と り の は
オ ホ ズ ラ 一 一 一 一 一 一 一 一



ア メ フ ル マ 一 ヘ ニ ス ミ ズ メ 一 ト
う ら シ の う ろ こ シ く さ ぐ さ ヨ 一 に
ア ラ シ ヲ オ コ シ ア メ ヲ ヲ 一 ビ

三〇

雲



カ ハ ル ズ フ シ ギ ク モ ノ イ ロ
か は る ぞ ふ し ぎ く も の さ ま
か は る ズ ふ し ぎ く も の さ ま

一、二、雲

一、朝日に燃ゆればもみの絹
夕日に映ゆれば錦にて、
晴れたる空の白無垢は、
雨降る前に墨染と、
變るぞ不思議、雲のいろ。
二、時には連なる峯となり、
時にはかさなる波と見え、
あるひは獸、鳥のはね、
魚のうろこと種種に、
變るぞ不思議、雲のさま。
三、遙けき山の端、遠き沖、
しづかに休むと見る中に、
大空わたり、海を越え、
あらしを起し、雨をよび、
變るぞ不思議、雲のわざ。

三一

一三、漁船

一、えんやら、えんやら、艦拍子そろへて
 朝日の港を漕出すれふ船。
 見よ、見よ、あの雲、今日こそ大れふ。
 それ、漕げ、それ、漕げ、おも舵とり舵。

二、ゆらりや、ゆらりと、浪間に揺られて、
 磯には網船沖には釣船。
 見よ、見よ、あれ、見よ。かかるは、捕れるは。
 網にも、糸にも、魚のかずかず。

三、えんやら、えんやら、獲物に勇んで
 入日の沖をば急いで漕ぐ船。
 見よ、見よ、濱邊に妻子が迎へる。
 それ、漕げ、漕げよや、艦拍子早めて。

漁船

♩=76

漁船

テてデ
へれん
らさ
ソウイ
シにニ
ウまノ
ビヤモ
ロなエ
ラとラ
ヤリヤ
ンらん
エウエ
ヤリヤ
ラヤラ
ンらん
エウエ

ンねネ
セぶフ
ーりグ
レつコ
スはデ
ダにイ
ギソ
コおイ
ヲねバ
トぶヲ
ナみキ
ミあオ
ノはノ
ヒにヒ
サそリ
アいイ

ーはル
レるへ
イれカ
タとム
ソはガ
コるコ
ーかマ
ケツ
モよニ
クみベ
ノれマ
アあハ
ヨよヨ
ミヨミ
ヨヨヨ
ミヨミ

チチテ
カカメ
リヤヤ
トカハ
チのシ
カナ
モカウ
オさロ
ゲもヤ
コにヨ
レとゲ
ソいコ
ゲもゲ
コにコ
レみレ
ソあソ

夏の月

夏の月

♩ = 108
 mp

一 スズシイカゼニ ユラユラト
 ニ すずしいかぜに ゆらゆらと

mf

ナミウツヒロイ イナダノウヘニ
 ゆられるかやの なかからみれば

mp

イツノマニ ウキデタカ マンマルイ ナツノツキ
 いつのまに でてきたか またここへ なつのつき

mp

キレイナカホシテ ニコニコト
 うれしいかほして にこにこ

夏の月

mf

ソラカラワタシヲ ナガメテ ル
 まどからわたしをのぞいてる

一四、夏の月

一、涼しい風かぜに、ゆらゆらと
 波なみうつ廣ひろい稲田いなだの上に、
 いつの間まに浮出うきでたか、
 まんまるい夏なつの月つき。
 きれいな顔かほして、にこにこと、
 空そらから私わたしをながめてる。

二、涼すずしい風かぜに、ゆらゆらと
 ゆられる蚊帳かやの中なかから見れば、
 いつの間まに出でて來きたか、
 また此所ここへ夏なつの月つき。
 嬉うれしい顔かほして、にこにこと、
 窓まどから私わたしをのぞいてる。

牧場の朝

$\text{♩} = 132$
mf *p* *p* *mf* *p* *mf* *p*

タ ダ イ チ メ ン ニ タ チ コ メ タ マ
 も う お き だ し た こ や こ や の あ
 イ マ サ シ ノ ボ ル ヒ ノ カ ゲ ニ ユ

キ バ ノ ア サ ノ キ リ ノ ウ ミ
 た り に た か メ い ひ と の こ ゑ る
 メ カ ラ サ メ タ モ リ ヤ ヤ マ

ポ プ ラ ナ ミ キ ノ ウ ツ ス リ ト ク
 き ア カ イ ヒ つ ま れ ニ あ ソ ち メ こ ラ レ タ ー ト

ロ ソ コ カ ラ イ サ マ シ ク カ
 ご ひ つ エ ニ い く ボ ク ム れ ノ す フ

p

ネ ガ ナ ル ナ ル カ カ ト
 す が な る な る り り と
 エ ガ ナ ル ナ ル ビ ビ と

一五、牧場の朝

一、ただ一面に立ちこめた
 牧場の朝の霧の海。
 ポプラ並木のうつすりと
 黒い底から、勇ましく
 鐘が鳴る鳴る、かんかんと。
 二、もう起出した小舎小舎の
 あたりに高い人の聲。
 霧に包まれ、あちこちに、
 動く羊の幾群の
 鈴が鳴る鳴る、りんりんと。
 三、今さし昇る日の影に
 夢からさめた森や山。
 あかい光に染められた
 遠い野末に、牧童の
 笛が鳴る鳴る、ぴいぴいと。

水車

♩ = 132

mp

一 モモノハナチルヲガハノミヅニ
二 つきのながれるをがはのみづに

mf *mp*

ヒトツカカタミヅグルマノドカニテラス
ひとつかかたみづぐるまみぎはのむしの

mf *f*

ハルーノヒアビテコツトンコツトン
なく一ねにつれてこつとんこつとん

mf *f*

クルマハマハルコツトンコツトン
くるまはまはるこつとんこつとん

一六、水車

一、桃の花散る小川のみに、
ひとつかかた水車。
のどかに照らす春の日浴びて、
こつとん、こつとん、車は廻る。
こつとん、こつとん、車は廻る。

二月の流れる小川の水に、
ひとつかかた水車。
汀の蟲の鳴く音につれて、
こつとん、こつとん、車は廻る。
こつとん、こつとん、車は廻る。

廣瀬中佐

♩=112

廣瀬中佐

ト ド ロ ク ツ ツ オ ト ト ビ ク ル ダ ン グ
 せ ン ナ イ く ま な く た ぬ る み た ン
 イ マ ハ ト ボ ー ト ニ ウ ツ レ ル チ ユ ウ ー び サ

ア ラ ナ ミ ア 一 ラ フ デ ツ キ ノ ウ ヘ ニ
 よ ー ナ ミ ア 一 ハ フ さ が せ マ ノ ミ ウ え す
 ト ビ ク ル タ 一 マ ニ タ チ マ チ ン セ ユ ミ ッ ッ ッ
 ヲ ヲ ね は し だ ヌ ク チ ユ ウ ー サ ノ サ ケ ビ
 リ ヲ ジ ャ カ ウ グ ワ イ ナ ウ ラ ミ ミ ゾ フ カ ミ キ

ス ギ ノ ハ イ ツ コ 一 ス ギ ノ ハ 井 ズ ヤ
 テ キ ナ ン ヒ よ い ッ い セ 一 あ た ノ リ に し げ レ ド
 グ シ シ ン ヒ ロ ヒ セ ト ツ ノ ナ コ レ ド

四〇

廣瀬中佐

一七、廣瀬中佐

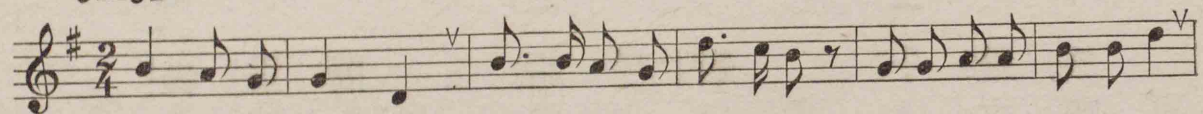
- 一、轟く砲音、飛來る彈丸、荒波洗ふデツキの上に、闇を貫ぬく中佐の叫。杉野は何處、杉野は居ずや。
- 二、船内隈なく尋ぬる三度。呼べど答へず、さがせど見えず。船は次第に波間に沈み、敵彈いよいよあたりに繁し。
- 三、今ほとボートにうつれる中佐、飛來る彈丸に忽ち失せて、旅順港外、恨ぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。

四一

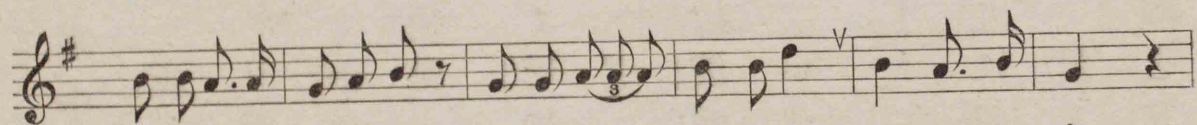
たけがり

♩=84

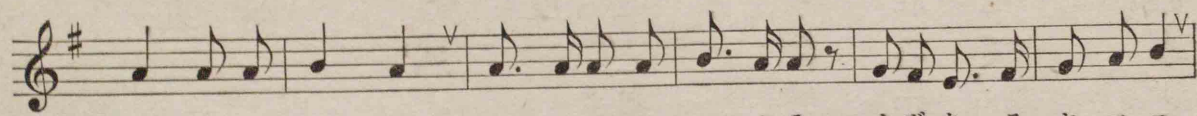
たけがり



アキノヒノソラスミワタリカゼアタタカニ
たどりゆくほそみちづたひはやかうーばしく



サテモヨキヒヤヤマアソビスルニヨキヒヤ
きのこにほへりやまかせにきのこかをれり

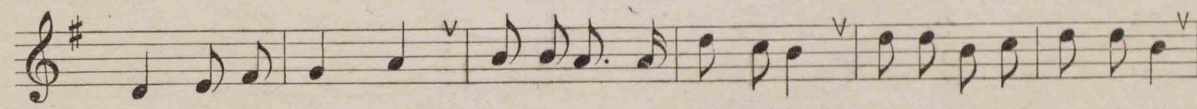


トモヨコヨテカゴヲモチテイザウラヤマニ
うれしこのまつのねもとにまづみつけつと

たけがり



キノコタヅネンヤマフカクユキテタヅネン
たかくよぶこゑやまびこにひびくよびこゑ



イデヤアノイハノコカゲニミナウチヨリテ



エモノカヅヘンタケガリノイサヲクラベ

一八、たけがり

秋の日の空すみわたり、
風暖に、さてもよき日や。

山遊するによき日や。

友よ、來よ、手かごを持ちて。

いざ、裏山にきのこたづねん、

山深く行きてたづねん。

たどり行く細路づたひ、

はや、からばしくきのこ匂へり。

山風にきのこかをれり。

「うれし、この松の根もとに、

まづ見つけつ。」と高く呼ぶ聲、

やまびこにひびく呼聲。

いでや、あの岩の小かげに、

皆うちよりてえもの數へん、

茸狩のいさをくらべん。

山 雀

♩=112

山 雀

mf

ク ル ク ル マ ハ ル メ ガ マ ハ ル
 よ い こ ら ひ ひ た つ な い ひ フ い た ミ
 ツ ケ ツ ケ カ ネ ヲ ヲ

ト ン バ ウ ガ ヘ リ チ ユ 一 ガ ヘ リ
 も い ち ど ラ ノ ひ い た ツ つ な ル ト ひ キ た ハ
 オ テ ラ ノ カ ネ ガ

mp

カ ハ セ ニ カ カ ル ミ ズ グ ル マ
 つ り べ の み づ を こ こ ぼ す す し ま か ま い
 オ マ ヘ モ ヤ マ ガ ガ コ ヒ シ カ カ ロ

mf

ビ イ ビ イ ヤ マ ガ ラ ビ イ ヤ マ ガ ラ
 び い び い や ま が ら び い や ま が ら
 び い び い や ヤ マ マ が が ら ら

一九 山 雀

一、くるくる廻る、目が廻る、
 とんばう返り、宙返り、
 川瀬にかかる水車。
 びいびい山雀、びい山雀。

二、よいこら引いた、綱引いた、
 もいちど引いた、綱引いた。
 釣瓶の水をこぼすまい。
 びいびい山雀、びい山雀。

三、つけつけ鐘を、一・二・三。
 お寺の鐘が鳴る時は、
 お前も山がこひしかる。
 びいびい山雀、びい山雀。

霜

♩=96

霜



一 サ サ ノ ハ ノ シ ロ キ ハ シ モ ノ
二 あ り あ け の き え に し か げ を



ヒ カ リ ニ テ マ ダ ヨ ハ フ カ シ
ま つ の は に し ば し の こ せ る



ノ ベ ノ ミ チ ノ ベ ノ ミ チ
し も の い ろ し も の い ろ

二〇、霜

霜

一、笹の葉の白きは霜の
光にて、まだ夜は深し、
野邊の道、野邊の道。

二、有明の消えにし影を、
松の葉にしばし残せる
霜の色、霜の色。

八幡太郎

♩=112

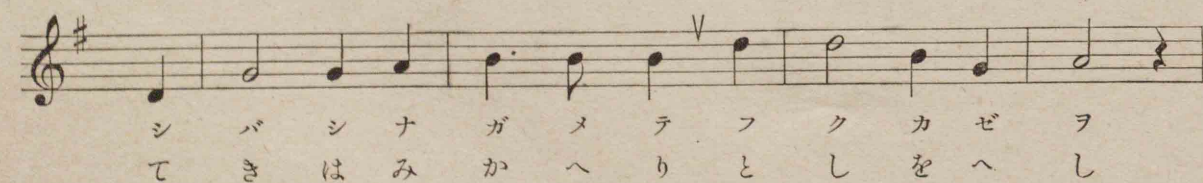
八幡太郎



一 コ マ ノ ヒ ヅ メ モ ニ ホ フ マ デ
二 お ち ゆ く て き を よ び と め て



ミ チ モ セ ニ チ ル ヤ マ ザ ク ラ カ ナ
こ ろ も の た て は ほ こ ろ び に け り



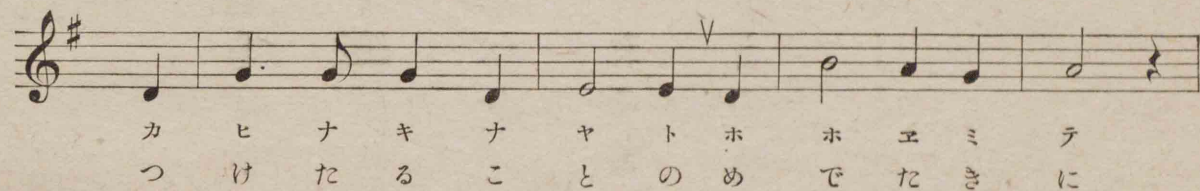
シ バ シ ナ ガ メ テ フ ク カ ゼ ヲ
て き は み か へ り と し を へ し

五〇

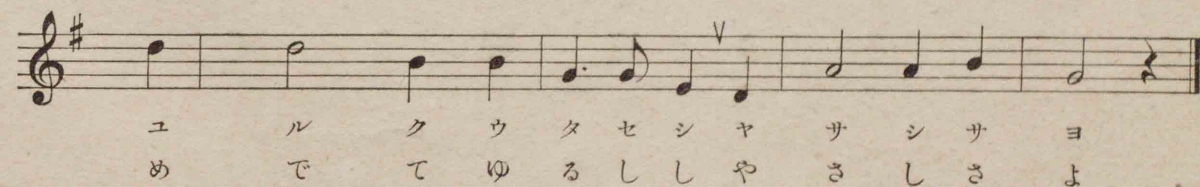
八幡太郎



ナ コ ソ ノ セ キ ー ト オ モ ヘ ド モ
い と の み だ れ の く る し さ に



カ ヒ ナ キ ナ ヤ ト ホ ホ エ ミ テ
つ け た る こ と の め で た き に



ユ ル ク ウ タ セ シ ヤ サ シ サ ヨ
め で て ゆ る し し や さ し さ よ

五一

二、八幡太郎

一、駒のひづめも匂ふまで、

「道もせに散る山櫻かな。」

しばしながめて、「吹く風を

勿來の關と思へども、

かひなき名やとほほ笑みて、

ゆるく打たせしやさしさよ。

二、落ちゆく敵をよびとめて、

「衣のたては綻びにけり。」

敵は見かへり、「年を経し

絲のみだれの苦しさに、

つけたることのめでたきに、

めでてゆるししやさしさよ。

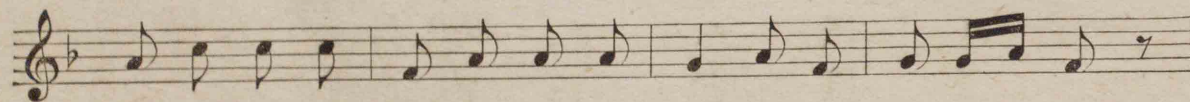
村の鍛冶屋

♩=84

村の鍛冶屋

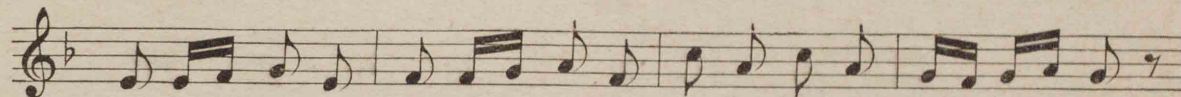


一 シバシモヤマズニツチウツヒビ一キ
 二 あるじはなだかきいつこくおや一ぢ
 三 カタナハウタネドオホガマコガ一マ
 四 かせぐにおひつくびんぼふ一な

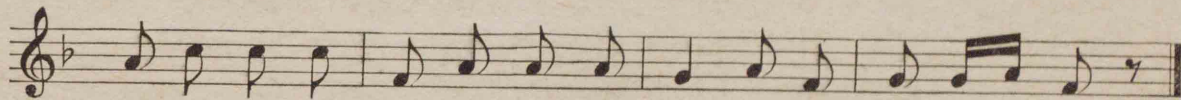


トビチルヒノハナハシルエダ一マ
 はやおおきはやくねのやまひしら一ず
 マグハニサカちグハスキヨナタ一ヨ
 めいぶつかちやはひびにはん一じやう

村の鍛冶屋



フイ一ゴノカゼ一サへイキヲモツ一ガ一ズ
 てつ一よりかた一しとほこれるう一で一に
 へイ一ツノウチ一モノヤスマズウ一チ一テ
 あた一りにるゐ一なきしごとのほ一ま一れ



シゴトニセイダスムラノカチ一ヤ
 まさりてかたきはかれがここ一ろ
 ヒゴトニタタカフランダノテキ一ト
 つちうつひびきにましてたか一し

二二、村の鍛冶屋

一、しばしも止まずに槌うつ響。
 飛散る火の花、はしる湯玉。
 ふいごの風さへ息をもつがず、
 仕事に精出す村の鍛冶屋。

二、あるじは名高きいつこく老爺、
 早起・早寝の、病知らず。
 鐵より堅しとほこれる腕に
 勝りて堅きは、彼がこころ。

三、刀はうたねど、大鎌・小鎌、
 馬鋏に作鋏、鋤よ、鉞よ。
 平和のうち物休まずうちて、
 日毎に戦ふ、懶惰の敵と。

四、かせぐにおひつく貧乏なくて、
 名物鍛冶屋は日日に繁昌。
 あたりに類なき仕事のほまれ、
 槌うつ響にまして高し。

餅つき

餅つき

♩=100 *mp*

一 ケフ ハ ウチ デ ハ モ チー ツ キ チヤ
 二 けふ は と な り の も ちー つ き ぢや

f ゆるやかに *p a tempo*

ベツタン コ ベツタン コ オ トウ サン ガ ツ イ テ
 べつたん こ べつたん こ お ぢい さ ん が の し て

mf

オ カ ア サ ン ガ テ ガ ヘ シ ネ エ サ ン テ ツー ダ ヒ
 お ば あ さ ん も て つ た ひ を ぢい さ ん を ばー さ ん

p *f*

ウ チ デ ユ ウ ー ー グ ル グ ル ー テ ン テ コ マ ヒ チヤ
 は ち ま き ー た す き で ー て ん て こ ま ひ ぢや

五八

mp

シ ハ ス ハ ミ ジ カ イ ソ レ ッ ケ ソ レ ッ ケ
 お し や う ぐ わ つ は め で た い そ れ つ け そ れ つ け

餅つき

五九

三三、餅つき

一、今日はうちでは餅つきぢや。
 べつたんこ、べつたんこ。
 お父さんがついて、
 お母さんが手がへし、
 ねえさん手つだひ、
 うち中ぐるぐる、
 てんてこまひぢや。
 師走は短い、
 それつけ、それつけ。

二、今日は隣の餅つきぢや。
 べつたんこ、べつたんこ。
 お爺さんがのして、
 お婆さんも手つだひ、
 をぢいさん・をばさん、
 鉢巻・たすきで、
 てんてこまひぢや。
 お正月はめでたい、
 それつけ、それつけ。

二四雪合戦

一、晴れたる朝の雪の原、
 東と西に立ちわかれ、
 用意、はじめの聲の下、
 手に手にとばす雪つぶて。

二、あたりてひるむ卑怯もの、
 恐れず進む剛のもの、
 雪を蹴ちらし、雪をあび、
 互に寄する敵味方。

三、劇戦今と見るうちに、
 後にひびく休戦の
 ラツパと共に、西東、
 一度にどつと鬨のこゑ。

雪合戦

♩=76

雪合戦

ラのニ
 ハモチ
 ノウ
 キケル
 ユヒミ
 ノムト
 サマ
 アヒイ
 ルテン
 タリセ
 レタキ
 ハアゲ

レのノ
 カモン
 ワのセ
 チー
 タウキウ
 ニムク
 シスビ
 ニスヒ
 トスニ
 シレロ
 ガソシ
 ヒおウ

タビシ
 シアガ
 ノをヒ
 エキシ
 コゆニ
 ノしニ
 メらモ
 ジち一
 ハケト
 イをバト
 一きツ
 ヨウラ

テたエ
 プカコ
 ツミノ
 キキキ
 ユテト
 スルト
 バスツ
 トよド
 ニニ
 テヒド
 ニガチ
 テたい

近江八景

♩=88

近江八景



一 ビ ハ ノ カ タ チ ニ ニ タ リ ト テ
 二 ま づ わ た り み ー ん せ た の は し
 三 イ シ ヤ マ デ ラ ー ノ ア キ ノ ツ キ
 四 し が か ら さ き ー の ひ と つ ま つ
 五 ミ ツ ヨ ツ イ ツ ー ツ ウ チ ツ レ テ



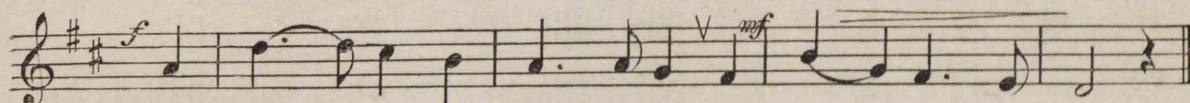
ソ ノ ナ ヲ オ ヘ ー ル ミ ズ ー ウ ミ ノ
 か が や く い り ー ひ う つ ー く し や
 ク モ ヲ サ マ リ ー テ カ ゲ ー キ ヨ シ
 よ る ー の あ め に ぞ な を ー え た る
 ヤ バ セ ヲ サ シ ー テ カ ヘ ー リ ユ ク

六二

近江八景



カ ガ ミ ノ ゴ ト ー キ ミ ズ ー ノ オ モ
 あ は づ の ま つ ー の い ろ ー は え て
 ハ ル ヨ リ サ キ ー ニ サ ク ー ハ ナ ハ
 か た た の う ら ー の う き ー み だう ー
 シ ラ ホ ヲ オ ク ー ル ユフ ー ー カ ゼ ニ



ア カ ー ヌ ナ ガ メ ハ ヤ ツ ー ノ ケ イ
 か す ま ぬ そ ら ー の の ど ー け さ よ
 ヒ ラ ー ノ タ カ ネ ノ ク レ ー ノ ユ キ
 お ち くる か り ー も ふ せ ー い あ り
 コ エ ホ ド チ カ ー シ ミ キ ー ノ カ ネ

六三

二五、近江八景

一、琵琶の形に似たりとて

其の名をおへる湖の、

鏡の如き水の面、

あかぬながめは八つの景。

二、まづ渡り見ん、瀬田の橋、

かがやく入目美しや。

粟津の松の色はえて、

かすまぬ空ののどけさよ。

三、石山寺の秋の月、

雲をさまりてかげ清し。

春より先に咲く花は、

比良の高ねの暮の雪。

四、滋賀唐崎の一つ松、

夜の雨にぞ名を得たる。

堅田の浦の浮御堂、

落來るかりもふぜいあり。

五、三つ四つ五つうち連れて、

矢橋をさして歸り行く

白帆を送る夕風に、

聲程近し、三井のかね。

何事も精神

♩=92

何事も精神

♩=92

ノハちふ キゲひる ヨミさひ リーきー オスあす ツスむに ルニもむに アナイな マニそに ダゴしご レトめと ノノばか

タナたふ エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな エナをな

イカせお シタンも ニキりき モモのも アツなつ ナヒみひ ヲニをに ウトわう ガホたつ ツスるす ナべなべ リシリし

六六

何事も精神

ワマレレキテ ハヤヒトト ウママレキテ

イツタン コーコ ロサダメテ ハ

コわーきめニもウふゴラカズーサおソこハたレらズ

六七

二六、何事も精神

一、軒のよりおつる雨あまだれの、
 たえず、休やすまず打うつ時ときは、
 石いしにも穴あなをうがつなり。
 我等われらは人ひとと生うまれ來きて、
 一いったん心こころ定さだめては、
 事ことに動うごかず、さそはれず、
 はげみ進すすむに、何事なにことの
 など成ならざらん、鐵石てつせきの
 堅かたきもつひにとほすべし。

二、小ちひさき蟻あひも、いそしめば、

塔たふをもきづき、燕つばめさへ、
 千里せんりの波なみを渡わたるなり。
 ましてや人ひとと生うまれ來きて、
 一いったんめあて定さだめては、
 わき目めもふらず、怠おこたらず、
 ふるひ進すすむに、何事なにことか
 など成ならざらん、盤石はんじやくの
 重おびきもつひにうつすべし。

二七、橋中佐

一、かばねは積りて山を築き、
 血汐は流れて川をなす、
 修羅の巷か、向陽寺。
 雲間をもるる月青し。

二、「みかたは大方うたれたり、
 暫く此處を。」と諫むれど、
 恥を思へや、つはものよ。
 死すべき時は今なるぞ。

三、御國の爲なり、陸軍の
 名譽の爲ぞ。」と諭したる
 ことば半ばに散りはてし
 花橋ぞ、かぐはしき。

橋中佐

♩=104

橋中佐

一 カミ バ ネ ハ ツ モ リ テ ヤ マ ヲ ツ キ
 二 ミ カ ク タ ノ オ ホ カ ナ タ リ ヲ タ ク レ タ ン ノ
 三 シ シ ホ ハ ナ ガ レ テ カ ハ ヲ ナ ス
 四 シ バ ホ ハ ナ ガ レ テ カ ハ ヲ ナ ス
 五 シ ユ ラ ノ チ マ タ カ シ オ ン ズ イ
 六 コ ト ヲ ナ カ カ ニ ツ チ は リ も ハ の テ シ
 七 ク モ マ ヲ モ ル ル ツ キ ア ヲ ヲ シ
 八 ハ ス ナ ベ タ キ ト バ キ ナ ズ カ グ ハ ヲ シ キ

七〇

發行所

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

代表者

取締役社長 杉山常次郎

發行者

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地

不許複製

著作權者

文部省

昭和七年十二月十日發行

昭和七年十月二十九日印刷

定價金拾參錢

尋常小學唱歌 第四學年用

16



広島大学図書

0130449411

